

P R E S E A S O N G A M E

B.LEAGUE 2024-25 シーズン
千葉ジェッツ プレシーズンゲーム in しばた

9.29 新発田市カルチャーセンター

千葉ジェッツ 90	16-18	69 秋田ノーザンハピネッツ
	17-12	
	31-24	
	26-15	



英雄
凱旋

HERO RETURNS

富樫勇樹

Togashi
Yuki

パリ五輪で日本代表の主将として活躍した富樫勇樹が、生まれ故郷の新発田市にB1リーグ千葉ジェッツの一員として凱旋。プロとしてのキャリアをスタートさせた秋田ノーザンハピネッツとプレシーズンゲームを行った。撮影・伊平裕哉（スタジオ島田）



得点力のある佐藤楓は「後輩たちにいいものを受け継ぎたい」と進んで手本になる



前主将の佐藤瑠。丁寧なプレーでチームの信頼も厚い



そ禁止になったものの、応援団長の大島智汎（3年）を中心に控え部員がメガホンを使って大声でチームを鼓舞する伝統のスタイル。横断幕も1980年代から掲げているもの。昔に近づけることは、当時を知らない現在の選手にとっては逆に新しさの追求でもある。

今年に入ってからさまざまな出来事があった。1月1日、能登半島地震が発生。部員らに被害はなかったが、いつも練習している体育館は床が波打ち、壁と床の間に大きな隙間ができた。現在もいびつなまま。当時は新潟市内の大学や公共施設を渡り歩いていた。その様子を知った開志国際の宮腰英樹監督の誘いで、同校で合同練習をするようになった。開志国際とは勝ち上がり準々決勝で対戦する。主力の1人、佐藤楓（3年）は「参考にするところがたくさんあった。やってきたことを全部出して勝ちたい」。勝つことが最高の恩返しだ。

3月14日、元監督の大滝和雄氏が病氣のため78歳で死去した。大滝氏は77年から96年まで新潟工を率い、この間、インターハイに11度、ウィンターカップに8度導いた。88年にはインターハイで新潟県勢初の3位、ウィンターカップではベスト4と新潟工の名を全国区に押し上げた。部にとつての恩師の逝去に庭野智監督はショックを受けた。OBではないが、監督就任時からさまざまなアドバイスをもらい、声をかけてくれていた。「大滝先生あつての新潟工。それを部員にも分かってほしいかった」。その気持ちは伝わっている。



練習内容を確認する庭野監督（右）と新潟工のOBでもある八子元気トレーナー。呼吸はぴったりだ



思いきりの良さでチームをけん引する長谷川

伝 統校、名門復活。「少しブレッツシャー」だけど、励みにもなる」。

前主将の佐藤瑠海（3年）が言うように「新工」の看板の大きさをメンバーは少しずつ感じるようになった。

5月の県総体終了後、チームは代替わりした。主将は佐藤瑠から2年生のエース、佐藤大翔に引き継がれた。3年生は就職活動や進学準備に入り、新学期になって本格的にウィンターカップ県予選に向けた追い込みが始まった。9月は静岡遠征など、ほぼ毎週のように練習試合。ペースになる1、2年生の新チームの強化、戦術確認、個々のレベルアップとやりたいことはたくさんあった。庭野智監督は「大翔や3年生に頼ってはだめ。大切なところでそういう状況がまだ見られる。それぞれを信頼し合うことが大切」と、より強固なチームの結束を求める。

1月の県高校新人戦（BSN杯）は3位、4月の近県大会は準々決勝で帝京長岡、決勝で開志国際を破って25大会ぶりに優勝した。県総体はベスト8。ただ、県8強レベルでは選手は喜べない。帝京長岡に敗れた県総体準々決勝を振り返り、得点源の1人、長谷川源泰（2年）は「留学生がいるとかいないではなく、勝たなければならぬ」。もう「古豪」とは呼ばせない。

「ネットなどに『昔みたいになってきた』という投稿があるのを見ると、少しほっとする」。庭野監督は周囲の反応をプラスに受け止める。1対1のハードな守備と攻守の切り替えの速さ、リバウンドの徹底。プレーはシンプルだが、その土台に「絶対に諦めず、激しく戦う」（庭野監督）という「新工らしさ」がある。応援は、太鼓の使用こ



新潟工業

2強を倒して名門復活を証明

新潟工業にとって復活、復権を懸けた県予選になる。昨年新潟県高校総体で9年ぶりのベスト4入りを果たして以後、県上位に定着してきた。全国切符獲得が夢から目標に変わってきた。

撮影●伊平裕哉（スタジオ嶋田） 文●佐藤一朗（編集部）



新潟中央

創部100周年の節目に女王として挑む

今年の県総体でライバルの開志国際を撃破し、悲願だった県の女王の座に就いた。
インターハイ(全国高校総体)でつかんだ自信を胸に、闘志はさらに燃え上がる。

撮影・文●わたなべまさひこ (Office Serendipity)

今

年の県総体決勝。4年連続となつた開志国際との対決は、宿敵の分厚い壁を71-67で破り、念願だった県の頂点に10大会ぶりに上り詰めた。これまであと1歩のところまで苦汁をなめてきただけに、試合終了を告げるブザーが鳴った瞬間、チームを率いて7年目となる関川哲平監督と選手は、うれし涙で抱き合った。

今年のチームで、昨年からレギュラーはセンター大崎優香(3年)だけで、歴代のチームに比べると経験不足は否めなかった。関川監督は結成当初からチーム作りを懸念していたという。

しかし不安は杞憂に終わった。新キャプテンに就いた田中愛来と双子の姉・田中愛実の姉妹が急成長。他の選手も成長するなど総合力がアップ。春の新潟地区大会で優勝した。「やってきたことは間違いない、勢いそのままに6月の県総体で最高の結果を手にした。」試合の結果は、毎日の積み重ねと準備」と関川監督は信じる。日頃から徹底してきたライバル対策が、今年結実した。「うれしい、の一言に尽きる」。先輩たちが何度も跳ね返されてきた厚い壁を打ち破り、選手たちは誇らしげに語った。

田中姉妹と、1年生から出場しているエース大崎が中心メンバー。この3人に、関川監督が「最も成長した選手」と話すセンター岩田奏音(3年)、次世代のエースとして期待を寄せる2年生の生田茉央が加わる。また、試合ごとにラッキーガールが現れるなど、チームの伸びしろはまだまだある。

就任当初から関川監督が貫いてきた新潟

中央のスタイルは「激しいディフェンスからの速攻」。インターハイでは1回戦で長崎西に勝利(78-66)。2回戦で大阪桐蔭に敗れ(57-65)、目標の全国2勝には届かなかったが、強豪相手に持ち味を発揮できたことは、再び全国へ向けてスタートを切る上での自信となった。課題も「シュート力とリバウンド」と明確になった。

「自分たちのバスケットはできたが、全国の舞台ではプレの精度の差を感じました。個人的にはもっとシュート力を上げ、チャレンジャー精神で再び全国を目指して頑張りたい」(田中愛実)

「先輩たちの思いを背負って戦い、開志国際に勝てたのはうれしかった。大阪桐蔭戦では負けているところから追い上げることができた。その粘り強さがチームとしての成長。責任感を持って、どんどん攻めていきます」(大崎)

「コミュニケーションを大切に、チーム全員の思いを背負ってプレーしている。リ



2年生で唯一、スタメンを張る生田。次期エースとしても期待される



今年のインターハイで3度目の全国舞台を経験した関川監督。その手腕に期待が高まる

174cmとチーム一の長身で、チームの成長株でもある岩田

右からキャプテンの田中愛来、大崎、田中愛実。3人は大島中(長岡市)からのチームメート



[新潟アルビレックスBB]

五十嵐 圭

「全てやる。チームを立て直すため帰って来た」

今季B3リーグで戦う新潟アルビレックスBB。

監督にはB1時代の18-19年に中地区で優勝した時のメンバー、鵜沢潤を迎えた。

その盟友の下で、44歳になった五十嵐はチームの中心に存在する。

リーグ最下部からの巻き返しだけでなく、球団そのものを改革するための1歩と位置付けてシーズンに臨む。

撮影●嶋田健一(スタジオ嶋田) 文●斎藤 慎一郎(日刊スポーツ新聞社)

コミュニケーションを大切に
チームをまとめる

——開幕のアウェーさいたま戦（9月27、28日・所沢市民体育館）、ホーム開幕の八王子戦（10月5、6日・アオーレ長岡）共に1勝1敗でスタートしました。

五十嵐 自分たちがリードしながらベースをコントロールできれば、勝ち星は増えていくと思います。でも、リードされると巻き返す力はまだないなど。劣勢になった時にどれだけ集中し、我慢できるかがカギになる。さいたま戦でそう感じましたね。八王子戦は久しぶりのアオーレ長岡での試合（※新潟の選手としては2021年5月10日の島根戦以来）なので、やはり楽しみでした。1戦目に勝ったときはたくさんのお客様さんの声援をもらって、「この景色を見るために帰って来た」と思いました。でも、やはり連勝しなければ。ホームなので絶対に負けられなかったんですけど。

——B3は初めて戦うカテゴリです。感じたことは？

五十嵐 やはりB1とは違います。予測できないというか。このタイミングで打つのか、この場面でこのポジションにいるのか、と、B1でのセオリーが通用しない。そのレベルに合わせてはいけなくて、勝つためにはしっかりと対応しないと。個人的には自分で点を取りに行くことを意識しています。3点シュートだけでなく、ドライブで仕掛けてレイアップも。ある程度僕が得点していかないと。バランスよく取ればいいですね。そこはシーズンを通してのことだとも思っています。

平野歩夢

MURAKAMIから再び世界へ

9月14日、平野が出身地村上に誕生したスノーボードハーフパイプの屋外トレーニングセンター竣工式に臨み、エアを披露。
「次も頂点を狙ってここで日々練習する」。1年半後に迫った冬季五輪に向けて連覇を誓った。

撮影●伊平裕哉 (スタジオ嶋田)



Hirano

P h o t o R e p o r t

Ayumu